たくみ

CraftSmanship

特集　たくみと「のれん」　第２号

藤原紀香とアフガンの孤児たち

情報や産業、経済のグローバル化のなかで、人びとはほんとうに幸わせになっているのでしょうか。

自らの信ずる価値を実現するためにアフガン、イラクはじめ世界のあらゆる地域で戦いが起っています。確かなことはそういったなかで犠牲になるのは民衆であり、失われるのは民族の尊厳と伝統文化だということです。

そういった暗い気持でいた昨年の暮れに、嬉しく励まされたことがふたつありました。

ひとつは女優の藤原紀香さんがみずからアフガニスタンを訪ねて撮った、難民やその子供たちの写真展です。有楽町の国際フォーラムで開かれ、実にナイーブな感性で状況を把え、人間味あふれて感動的でした。

テレビでそれが報道された折り、紀香さんの話で、カブールで孤児たちと交流したとき、余りにも全てを失い食物も不足した悲惨な状況に同情の余り、「みんな、日本に行ってみたい？」と聞いたら「行きたくない！」「どうして」とたずねると、声を揃えて「だって、この土地が好きだから」

その子供たちの顔がとても輝いていて心を打たれたそうです。人びとにとって、愛も、豊かさも、美しさも、個別なものだということが良くわかります。

さてもうひとつは、アメリカの同時多発テロの犠牲者遺族による戦争反対の運動です。これについては十二月二十七日夜、ＮＨＫでドキュメントで放送されました。

報復はさらなるテロを招くだけだと信ずる彼らの自主的なグループは、メディア報道の一極化に反対してねばり強く戦争反対の意見を展開します。彼らの勇気と人間性のすばらしさが、多くのことを私たちに語りかけます。

（志賀直邦）

伝統の仕事
「裂織」について

裂織と書いて、さきおりと読む。昔から東北地方や佐渡で盛んで、沖縄にもあったという。ボロ織とも称ばれたくらいだから主に生活の厳しい地方で活用された智恵で、着古された木綿や絹地を細かく裂き、それを緯糸（よこいと）として主に平織で織った仕事である。

二次再生の仕事だからもともとの布地に比べて美しさや着易さで劣るかというと、それがそうでもない。

まず素材の着物や浴衣が裂かれて再構成されることで、実に落ち着いた色調となる。それに緯糸が布裂（ぬのぎれ）だから厚みがあって温かく、さらに洗い晒してあるから肌ざわりが良い。

江戸の戯作者西鶴の「好色一代男」に「裂織の肌馴れしを木曽の麻衣に着替えさせ」とあるのも、裂織の良さをいっているのである。

民藝運動のなかで柳宗悦も裂織をたびたび取りあげている。運動初期の昭和二年の御大礼記念博覧会の日本民藝館出陳の敷物は、今でもアサヒビールの大山崎美術館にある筈である。

近年見た海外の旧作では、「浜田庄司と英国の工芸運動展」（松涛美術館）に出品されたエセル・メイレ夫人のカーペットや、「シェーカーのデザイン展」（西武アートフォーラム）の敷物が、いずれも質朴そのもので印象深かった。

裂織のクッション

フィンランドなどでは裂織は産業として行われ、古裂（こぎれ）ではなく新しい布地をバイヤスにカットして緯糸を作り、巧みな起毛加工によって独特な風合いを作っている。少し重いが断熱の優秀さは北欧ならではである。

日本でも近年裂織を手がける人たちが増えたが、その技術やデザインの進歩には目を見はる思いである。

昨年九月に東京沼袋のシルクラブで第一回の全国裂織展が行われ、併せてシンポジウムが開かれたが、今後の裂織の大きな可能性への期待とともに、デザインと用途においていくつかの危懼をもった。

やはり織物であり衣料であるからには作品に社会性や普遍性をもちたい。裂織はたいへんに手間のかかる仕事であるから製品はどうしても割高になるが、何らかの協業によってその点が克服されることを将来に期待したい。

（S）

たくみと「のれん」

「のれん」は一年を通して、もっとも親しまれる染織品のひとつである。もともと禅寺で冬に簾の隙間風を防ぐのに用いた垂れ幕をいったが、禅寺というからには鎌倉時代あたりが起原かと思う。江戸時代以降は商家で屋号など染め抜いて店頭に下げたのはご承知のとおりである。

たくみも昭和八年十二月の開店時、芹沢銈介先生製作による屋号入りのれんで店頭を飾ったと記録にある。そういえばエッセイストの山本夏彦だったと思うが、以前ある雑誌にこんなことを書いていた。「日本で、のれんを初めて商品として売ったのは、芹沢銈介で、昭和のはじめのことである」

芹沢先生の東京での初の個展は、たくみ開店の翌年四月五日からだったから、すると芹沢作品ののれんを、商品としてはじめて取り扱ったのはたくみだったのか。そして七十年近く前に先生が制作された柄は、いったいどんな模様であったのかうかつにも知らないでいた。

そこで芹沢全集や作品集などの資料で調べてみた。確認できたもので昭和元年（一九二五）から十五年（一九四〇）までの戦前の作品で、日本民藝館蔵の「悦」（次頁写真一）と「桃図」をはじめ、「福」「晴」「和」「喜」「寿」などの文字柄に「竹文」「柳文」「菊文」など計十一柄ほどであった。

もとよりのれんは日常に使われるもので消耗品だから、戦前の作品のなかで損耗や戦災で今日まで遺されなかった数はかなりのものだろう。それにしても戦後に発表された「御滝図」や、「縄のれん文」「風の字」など数かずの名作を含め、芹沢銈介が工藝作品としての、のれんの美の普及に果された功績は大きい。

ところで芹沢銈介は戦後間もなく仲間や弟子たちと染色家のグループ萠木（もえぎ）会を結成し、協力による積極的な制作活動を行ってきた。そのなかから育った作家が岡村吉右衛門、小島悳次郎（こじまとくじろう）、柚木沙弥郎（ゆのきさみろう）、四本貴資（よつもとたかし）、大橋豊久、大橋秀雄たちである。多くは国画会に所属し、教職も含めてわが国の染色工藝界で指導的役割を果してきた。

四本の捺染（なっせん）を別に、あとの人たちは芹沢と同じく型紙を用いた型絵染である。型による模様の形象化と量産効果が、人びとに広く受け入れられる要因となった。もとより手染めによる入念な仕事であるから工藝作品としての価値も高い。

萠木会同人の仕事は、芹沢同様多岐にわたっている。服地、カーテン地、壁掛、卓布、座布団地などそのモダンな造形表現は広く支持され、また浴衣は、萠木浴衣という名で知られた。萠木会はいまはないが、制作活動は作家それぞれによって活発につづけられている。（S）

一　芹沢銈介　悦　（日本民藝館蔵）

三　小島悳次郎　壷におしどり

二　柚木沙弥郎　犬とたけのこ

四　柚木沙弥郎　鯛のりねこ

のれんの寸法、価格、納期などについては担当者（豊岡、千野）宛お問い合わせください。

五　大橋秀雄　犬張子

六　同　置物ちらし

七　同　洲浜

八　同　壷に鳥

九　同　バイオリン

十　同　ひょうたん

及川ホームスパン賛歌

古川正夫

昭和二十七年、学校を卒業した年、「たくみ」に入社し、専務の山本正三さんのもとで創刊間もない「月刊たくみ」の編集に携わったものとして、志賀さんの手によって「たくみ」が復刊されたことを、我がことのように嬉しく思いました。

第一号の及川全三氏のホームスパンの記事を拝見して、これにまつわる今は昔の懐かしい思い出話を、紹介させていただきます。

私が入社したとき、たくみはもっと新橋寄りの三階建木造店舗でした。二階は吹き抜けの中二階になっていて染織部が置かれ、そこにきものデザイナーの大塚末子さんがいました。大塚さんはたくみを起点に、瞬く間に有名になり全国に名を馳せるようになりましたが私と大塚さんとの運命的出会いから半年もしないうち、日本橋高島屋に招聘され、さらに麹町で和裁学校を開設するようになりました。

また、後に東京民芸協会の創立者で雑誌「民芸手帳」の編集者の白崎俊次さんもよく出入りしていました。

私はたくみに在職すること数年の後急成長中の大塚さんの学校に、少し遅れて山本さんも招聘されました。

白崎さんは、いつもベレー帽にツイード風ブレザーというダンディないでたちでした。

その白崎さんが、いつか私と大塚さんがいるところに遊びにきて、

「おばちゃん（大塚さんは誰からもこういう愛称で呼ばれていた）、この上着見てよ」

と言って背広の裏を返して見せ、

「ほら、もう裏がぼろぼろだろう。だけど俺これが好きで捨て切れないで、こんなにぼろぼろになるまで着ているんだよ」

と自分の愛着物へのこだわりを誇らしげに語っていたことが忘れられません。その上着こそ、及川さんのホームスパンを仕立てたものだったのです。

それから少したって、及川さんの工房で織られたホームスパンを持って及川さんのお弟子が大塚さんを学校に訪ねてきました。私も山本さんも呼ばれ私は二着分の生地を買い、ブレザーに仕立てました。渋い茶系とグリーンぽい浅黄色の両方ともなんともいえない深みのある生地で、見たとたん一辺に好きになりました。

それから二十数年間、私はそれをとっかえひっかえ愛用し、白崎さん同様裏地はボロになり、二度も張り替えたほどでした。

自分の好みに合った良質のものが、たとえそのとき高価だったとしても飽きがこず長持ちし、終局経済的になるかを、私と白崎さんの例は物語ってくれます。

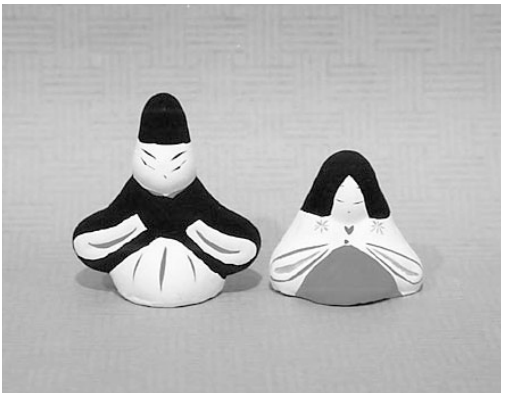
（山種美術館嘱託）

たくみ歳時記

郷土雛のこと

松が明け十日もたつとデパートや街の店やで、雛人形が華やかに飾られる。春を告げるひとつの風物詩である。

古く三月の初の巳の日に、紙や藁の人形で身体をなで穢れを払い、水に流して神送りする行事があった。この雛流し習俗は今でも鳥取地方で流し雛として残る。



鳥取の廉兵衛雛

平安時代に貴族の間で行われた「ひいな遊び」は、江戸時代に入って庶民の間に拡まり年中行事として三月三日に定着した。

雛人形も立雛、座雛、段飾りなどと発達し、京、大阪、江戸に雛市が立つようになると贅を競うようになった。

秋田の八橋人形雛

また地方では藩の殖産振興のために、伏見などから人形師や陶工を招んで土人形などを作り、とくに農村部では土雛は「嫁っこのまつり雛」といって、農家の嫁入り道具に欠かせないものであったという。

現在ではこういった郷土雛を作るところはごく少い。青森は弘前の下川原（したかわら）人形の土雛、秋田の八橋（やばせ）人形をはじめ、東京の今戸焼や鳥取の廉兵衛雛、広島の三次人形、大分や佐賀能古見の土雛など、張子のものでは福島高柴の田舎雛や春日部張子などといったところか。

もっとも最近は和のブームとかで、郷土風の内裏雛やだるま、招き猫などが大量に店頭に並んでいる。ご多聞にもれずこれらの多くは中国や東南アジアで作られている。

正月や節句の行事に因む、私たちの伝統文化をこそ大事にしたいものである。

売場紹介

新宿小田急民藝品売場

新宿駅の西口、都庁側にある小田急百貨店の八階、家庭用品売場の一角にあります。

デパートにあるたくみの売場のなかでもこじんまりとしたショップですが、四季折り折りの風物詩を演出し、お客様のふだんの暮しに日本人らしい彩どりをと心掛けております。

取り扱う品々もひとつひとつ吟味し、ものにより別注も承ります。また以前別館ハルクにて展示していた松本民芸家具も、カタログにてご覧に入れご注文を承ります。売場にはたくみの社員二名（津出、関根）が常勤いたしておりますので、どうぞなんなりとお申し付け下さい。また美術品売場にも金城次郎、島岡達三作品など常時出陳いたしております。併せてご利用下さい。

たくみの新宿小田急民藝品売場

ご寄稿下さい。

小冊子「たくみ」もより内容を充実していきたいと思います。民藝を愛して下さる皆様のご寄稿を期待しております。民藝への想い、愛用の一品、旅先から、読書評、作り手紹介などさまざまな小稿をお寄せ下さい。

あとがき

「たくみ」復刊について、喜びや励ましのお葉書やお電話を数多く頂き、心から嬉しく思っております。とくにホームスパンの及川全三先生に関する記事に反響が多く驚きました。

いま手仕事、それも本物の手仕事についての関心や自覚が拡がりつつあることを強く思います。

地球の自然の営みに学び、民族の伝統文化に誇りをもち、社会生活のなかで人との心の交流を大事にし、肌の色や宗教のちがいにも思いやりをもつ生き方、それが民藝の心と思います。

平成十五年を迎え、さらに希望に燃えて努力します。ご支援下さい。（S）

発行　株式会社たくみ
東京都中央区銀座八－四－二
発行責任者　志賀直邦
電話　〇三－三五七一－二〇一七
FAX　〇三－三五七一－二一六九
振替　〇〇一一〇－二－三五六五九
定価　六〇円（税込）